

アルピニスト

野口健 36

(東京都世田谷区)

3月中旬、フィリピンで日本兵の遺骨収集活動を終え、帰国の途についたわれわれの心は重かった。ジャングルの中はゲリラや山賊が多く、治安が悪い所ばかり。苦勞を重ね、やっと遺骨を発見しても地元行政官らが「わいろ」を要求してくる。そんな厳しい状況の中、一部の週刊誌に、まるで私たち(NPO法人「空援隊(くうえんたい)」)が、フィリピン人の墓荒しを行い、骨を買い集めているかのような記事が掲載された。私

アルピニスト

一致団結して遺骨収集に取り組もう

は過去5回、フィリピンで遺骨収集・調査に参加したが、そのような行為を見たことは一切ない。フィリピンの遺骨収集は約6年前、フィリピンの大学教授による「鑑定人制度」が導入された。遺骨の骨格などから「日本人であるか否か」を科学的に根拠で検証する」というのだが、バラバラに碎けてしまった遺骨を鑑定するのは限界がある。日本兵の遺留品があるのが、鑑定人に「判定不能」とされれば、せっかく収集した遺骨を帰すことができない。そんな悔しい経験を何度も繰り返してきた。

昨年になり厚生労働省とフィリピン政府が合意し、鑑定について新制度が導入された。現地住民の情報、土地所有者の証言、地域の行政府長の了解を得ていることを「公正証書」にし、フィリピン国立博物館の鑑定を得た上で「日本兵の遺骨で飛躍的に増加した。週刊誌の記事は「そんなに多くの遺骨が収集できるわけがない。インチキをしているのではないか」というが、私はこうした「システムの違い」が大きいと思う。

フィリピンにはまだ約38万体の遺骨が取り残されたままだ。身内で対立している場合ではない。新参者の「空援隊」に対し、厳しい目があることも知っているし、至らない点は今後も指摘していただきたい。今こそ日本人が一致団結して遺骨収集に取り組もうではありませんか。